

若犬は、今度こそ本当に名前のないひとりぼっちの野良犬になってしまった。

あちこち民家の建ち並ぶ辺りを彷徨い、家の軒先やら納屋の陰などを渡り歩いた。

季節は、もうすぐ夏になろうとしていた。

公園の小さな噴水で喉の渴きを潤した若犬は、細い砂利道に沿って植えられているツツジの根方にもぐりこんで体を休めた。

満開の淡い色のツツジの花に、ミツバチが羽音をたてて飛びかい、花の奥にもぐりこんでは、また別の花に飛び移っていく。

若犬は、ムク犬のゴンの言ったことを考えながら、かつての飼い主を思い出していた。

一体、何故自分は置き去りにされたのだろうか……何があったのだろうか……

しかし、どう考えても自分の身に起こった事に戸惑うばかりであった。……お前はもう、うっちゃられたんだ……

ムク犬の言葉は、呪文のように若犬の頭の中を駆けめぐった。

その時、鮮やかな色のボールがころころと転がって、自分の足元近くで止まった。

間もなく、子供の声が出た。

「あ、ワンワンだ……おかあさん、ワンワンがいるよ」

頭を上げると、小さな男の子がボールを追いかけてツツジの植え込みに駆け寄ってきて、若犬を覗き込んでいた。

本能的に危険を感じないその気配に若犬は、顔だけを挙げて子供を見つめた。

年のころは、三歳くらいだろうか

「 ああ…：坊ちゃん…：坊ちゃんだ…：いや、坊ちゃんはもう少し大きかった。そう…：学校鞆を背負っていつも朝走って玄関を飛び出してた…：」

若犬は、かつての生活を思い出した。

その子供は、親しげに若犬を眺めている。

若犬もその子供の表情に懐かしさと親しみを覚え、自然と尻尾がユサユサと揺れた。

少し体を起こして、子供の方をまっすぐに見た。口元が緩んで自然と笑みが浮かんだ。尻尾がますます元気よく揺れた。
なんだか嬉しくなった。

「 坊ちゃん、遊びましょう…：」

若犬は、尻尾を振りながらいつでも立ち上がれる体制をとって待った。

「 あらあ、ほんとだ…：」

あとから母親が近づいてきた。優しげに子供の後ろからやはり覗き込んでいる。

「 あ、お母さんですね…：こんにちは…：」

「 おっきなワンワンね…：」

若犬はますます嬉しくなった。人間に自分の存在を認めてもらい、声をかけてもらったのである。

「 どのおうちの仔かなあ…：」

「どこの仔かしらね……首輪してるわね、どっかのおうちのワンワンね……」

「うん、首輪してる……逃げてきちゃったのかな……」

「さあ、どうかしら……」

「……遊びたいな……」

男の子は犬に触ろうと、そっと手を伸ばした。

若犬も、子供に向けて鼻を伸ばし、じっと撫でてもらうのを待った。

その時、反射的に母親が子供の手を止めた。

「やめなさい」

驚いたように母親の方を見上げる子供に、その母親はあわてて諭すように

「お昼寝してるから……ね、そっとしときましょ……」

「……」

母親の言葉に、男の子は少しつまらなそうにコクリとうなづいて立ち上がった。

そしてボールを抱えると、何度も振り返りながら、母親に手を引かれてその場を離れた。

親子は行ってしまった。

「あ、行っちゃった……」

揺れていた尻尾が、ゆっくり止まった。

若犬は、それ以上体を起こすことなく、眼だけで親子を見送った。

もつとあの子と話がしたかった。出来ることなら、一緒に遊びたかった。

「うっちゃられる……って、こういうことか……」

若犬は、これからは本当に誰も自分をかまってくれる者はなく、人間に期待することなく、すべて自分で生きていかなくはならないことを実感した。

ゆるやかな風が吹いた。

遠くで子供の声がする。

無気力に起き上がると、再び芝生のそばにある小さな噴水の水を飲んだ。そして、ウーンと伸びをしてから、体を思いつきりいブルブルと振るって毛並みをさばくと、辺りを見回した。

穏やかな昼下がりの公園、少し離れてさっきの親子が見える。

若犬は、彼らに背を向けると歩き出した。

つづく